

Nuclear Weapon & Nuclear Test MONITOR

核兵器・核実験モニター

239
05/8/1

毎月2回1日、15日発行
1996年4月23日
第三種郵便物認可

軍事力によらない安全保障体制の構築をめざして

¥200

発行 ■ NPO法人ピースデポ/PCDS (太平洋軍備撤廃運動): Pacific Campaign for Disarmament and Security

223-0051 横浜市港北区箕輪町3-3-1 日吉グリーン102号

Tel 045-563-5101 Fax 045-563-9907 e-mail: office@peacedepot.org URL: http://www.peacedepot.org

編集責任者 ■ 梅林宏道・田巻一彦 郵便振替口座 ■ 00250-1-41182 「特定非営利活動法人ピースデポ」

銀行口座 ■ 横浜銀行 日吉支店 普通 1561710 「特定非営利活動法人ピースデポ」

特報

米海軍イー
ジス艦のミ
サイル防衛
任務

奥尻島西方190kmに 作戦区域

独自調査で日本海パトロールの実態を暴く

数か月にわたる調査の結果、ミサイル防衛任務をもった米海軍のイー
ジス艦の日本海パトロールの実態が、初めて明らかになった。パトロールとは、日本海
をウロウロ動き回って監視しているのではない。「ミサイル防衛作戦区域」と呼
ばれる海域を設定し、そこに集中的に滞在する監視・追跡体制を構築しようとし
ている。そのような「作戦区域」が、奥尻島西方190kmに設定されていることが
確認できた。とは言っても常駐体制とはほど遠く、試験段階に過ぎないことも明
白になった。横須賀を母港とするイー
ジス艦「カーチス・ウィルバー」「フィッ
ツジェラルド」「ジョン・S・マッケイン」の航海日誌で明らかになった。

航跡を見る

米海軍は、2004年10月1日から、日本海
において北朝鮮からの弾道ミサイル発射を
想定した弾道ミサイルの監視・追跡活動を
開始したことを認めていた¹⁾。また、AP通信
は、同日、任務に就いた最初の軍艦が横須
賀を母港とするイー
ジス駆逐艦(アー
レイ
パーク級)カーチス・ウィルバーであること、
他に同種のフィッ
ツジェラルドと
ジョン・S・
マッケインであることを米海軍役人が確認
したことを伝えていた。

筆者は、これら3艦の航海日誌を、ワシ
ントンDCの海軍歴史センターで閲読し、その
実際の航跡をたどることによって、日本海パ
トロールの実態調査を試す。まず、その結果
を見てみよう。

カーチス・ウィルバー(DDG54)

カーチス・ウィルバーについては、04年9月1日~05
年1月31日の5か月の航海日誌を閲読した。2月以降の
日誌は未着であった。

04年9月27日、横須賀を出航。航海日誌には、その時

今号の内容

特報 米イー ジス艦の日本海 MD作戦の真相を暴く

[データ] イー
ジス艦3隻の航海記録

[資料] 米ミサイル防衛局長の議会証言

【新連載】いま語る

第1回 大石芳野さん

フォトジャーナリスト

梅林宏道

図1 イージス駆逐艦カーチス・ウィルバーの航跡
(04年9月27日～10月26日)

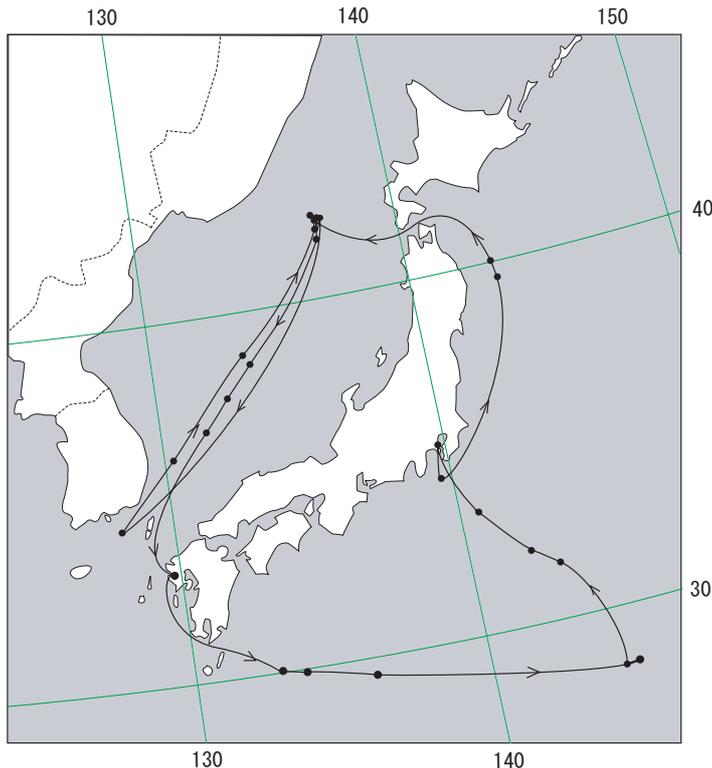
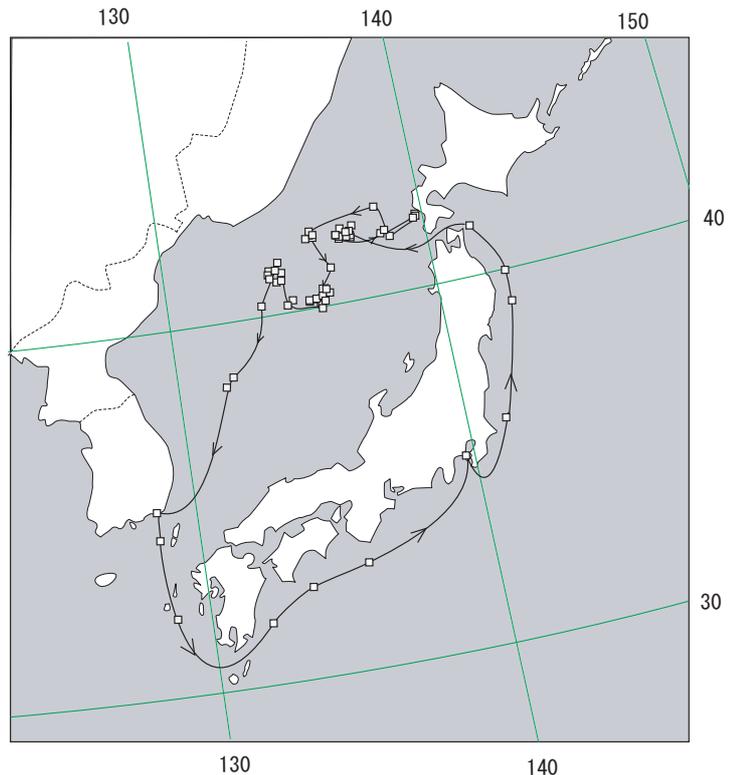


図2 イージス駆逐艦フィッツジェラルドの航跡
(04年11月22日～12月31日)



から行き先を「日本海」と書いていた。9月30日に「00:00 BMDを支援して、以前と同じように、日本海を航海中」と初めてBMD(弾道ミサイル防衛)の記述が登場した(6ページ上段参照)。10月1日も00:01 監視の任につく。前と同様、BMDを支援して日本海を航行中」と書かれていた。ただし、この時の監視という意味は、航海日誌に常に登場する日誌担当者の勤務を意味する。

10月9日には、対馬海峡に向かうが行き先を「BMDステーションから対馬海峡へ」と書いている。「ステーション」は定まった作戦区域を指す言葉である。また、「BMDステーション」はしばしば「MODLOC」と記載されている。この言葉も航海日誌に頻繁に登場する言葉であるが、BMDに限らず恒常的に使用される海域を指す。海軍歴史センターの専門家に訊いたところ、「頻繁に使うが多分「modular location(標準海域)」ではないか」と言うことで明確ではなかった。

本論では、他の軍艦の行動も合わせた分析の結果、後に述べるような共通の海域を「BMD作戦区域」としたが、カーチスウィルバーは、約10日間、そのBMD作戦区域で任務に就いたことになる。

航跡図を見ると一見、日本海を往復パトロールしているように見えるが、そうではない。10月9日に台風22号が紀伊半島沖を北北東に進んでおり、台風避難の行動を取ったために日本海を往復した形になっている。

10月16日、佐世保に寄港し、その後10月26日、横須賀に帰港。その後は、沖縄作戦区域、フィリピン沖作戦区域方面へ25日間の演習に出かけた。横須賀に帰港後は、10日間修理ののち、鹿児島に寄港。12月9日に横須賀に戻って修理とクリスマス休暇。1月末まで基本的に横須

賀に停泊した。

フィッツジェラルド(DDG62)

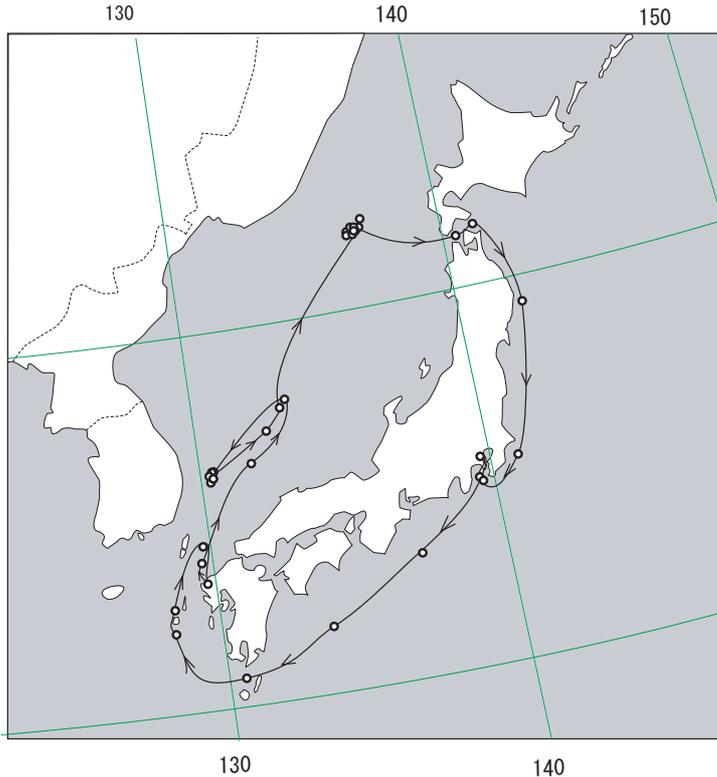
フィッツジェラルドに関しては、04年10月1日～05年2月28日の5か月の航海日誌を閲覧した。3月以降の日誌は未着であった。

04年11月29日に横須賀を出航するまで、10月と11月は基本的に横須賀に滞在した。29日、出港時から行き先を「BMDステーション」と書いた。12月1日の日誌の行き先は「BMD作戦区域(operarea)」と書かれている。この二つは同じものを指している。なぜならば、同日午前0時の日誌本文には「00:00監視を継続。日本海を単独で(iss) BMDステーションへと航行中」と書かれ、同日の深夜23時には「23:00監視を継続。日本海を単独で航海中。現在はBMDステーションにいる」と記述されているからである(6ページ下段参照)。

フィッツジェラルドの場合、かなり本論で特定した作戦海域を超えて広範囲にわたってBMD活動を行っている。作戦海域は、複数設定されていく可能性もあると考えられる。周辺に滞在する期間も含めて約9日間BMD作戦区域の活動を行っている。

12月17日、フィッツジェラルドは釜山に寄港、その後横須賀に向かって12月22日、横須賀に帰港した。クリスマス・新年を横須賀で過ごすとともに、05年2月7日まで基本的に横須賀に停泊した。同日、舞鶴に向けて出港、舞鶴に寄港の後沖縄作戦区域へ向かった。2月18日、沖縄作戦区域から香港に向かい、21日に寄港した。25日に香港を出港し、沖縄作戦海域に向かった。

図3 イージス駆逐艦ジョン・S・マッケインの航跡
(05年1月13日～29日)



ジョン・S・マッケイン(DDG56)

ジョン・S・マッケインに関しては、04年10月1日～05年3月31日の6か月の航海日誌を閲覧した。4月以降の航海日誌は未着であった。

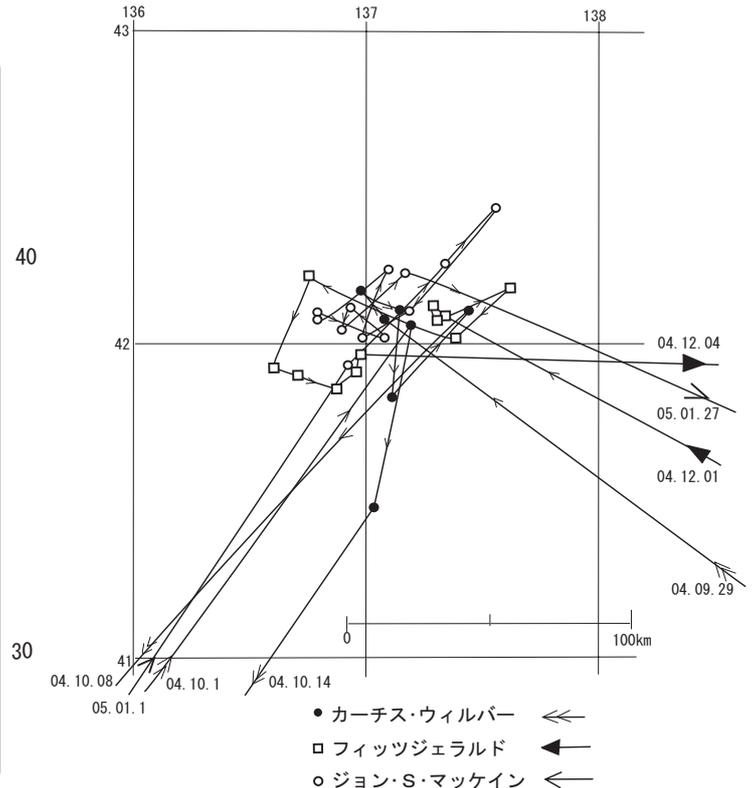
04年10月21日、マッケインは横須賀を出港して沖縄、東シナ海で演習、11月22日帰港した。まず、この期間、マッケインはカーチス・ウィルバーに代わって日本海でBMD任務に就くことができたのにそうしなかったことに注目しておきたい。米海軍は、常時、日本海パトロールをするという体制をとっていなかったのである。

東シナ海からもどったあとは、横須賀に停泊した。そして、05年1月13日、佐世保に向かうが、途上である14日の行き先欄には「BMDステーション」とあり、最初から任務は明確であったことを示している。16日に佐世保に寄港し、17日に佐世保を出港するが、その時の行き先欄には「BMDステーション」と明記された。

佐世保を出てから、韓国の浦項沖で滞留しているが、RAS(海上補給ボックス)という記述が航海日誌に書かれており、併走しながら補給艦から補給を受けるために待機したと思われる。また、マッケインの場合、その後の航海日誌にはBMD作戦区域という単語は登場しない。しかし、後述するように、本論が定義する「BMD作戦海域」とピタリと一致する狭い海域で作戦行動に従事している。行動期間は比較的短く、5日間であった。その後まっすぐ横須賀に向かい、1月29日に帰港した。

横須賀に寄港後、数日をおいて2月3日、マッケインは小樽に向かい、2月5日～9日まで小樽に滞在した。小樽を出て日本海を航海するが、韓国の鎮海に11日に寄港するまで、ほぼ真っ直ぐに航行しており、BMD監視・追跡

図4 「BMD作戦区域」における航跡(04.9.27-03.3.31)



任務に就いていないと思われる。小樽寄港は直接の監視・追跡任務とは切り離して行われている。

レイクエリー(CG70)

ここで一言、イージス巡洋艦レイクエリーについて触れておく。同艦は海軍MDの迎撃ミサイルであるスタンダード・ミサイル(3 SM3)の発射テスト艦であることが知られている。04年9月22日に横須賀に帰港し、10月11日に新潟に寄港した。そのため、10月1日からのミサイル防御のための日本海配備と推測された。

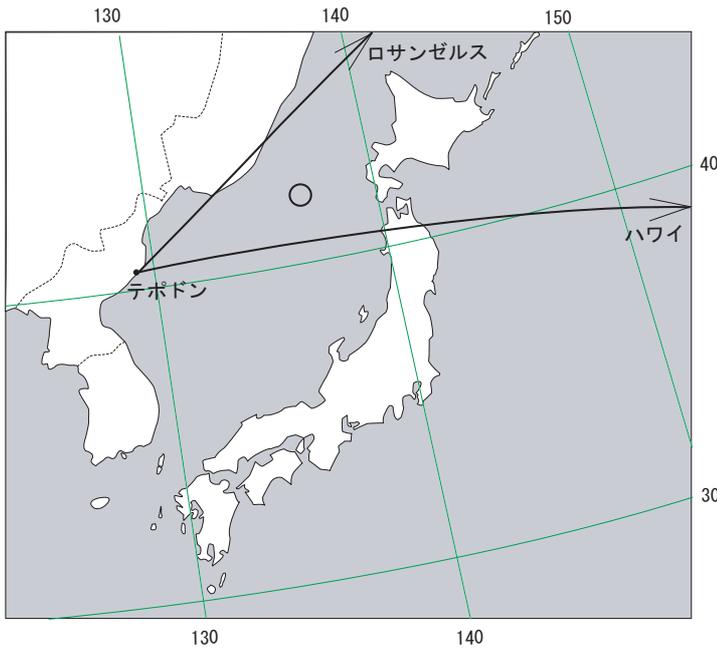
筆者は、9月、10月のレイクエリーの航海日誌も閲覧、分析した。その結果、筆者は、同艦の西太平洋配備は、イージス駆逐艦のような10月から始まったMD監視・追跡のための配備ではなかったと結論づけた。もちろん、新潟寄港にはMDを想定した慣熟航海・寄港の意味があったであろうし、同じ時期に日本海にいたカーチス・ウィルバーと何らかの連携演習を行った可能性は否定できない。直接のレイクエリーの配備目的は、米海軍が発表した通り、フィリピンや沖縄海域における大規模演習への参加であった。

「BMD作戦区域」

以上のように、3艦は、この期間1回ずつBMD監視・追跡作戦に従事するために日本海に配備された。それに関係した航海の航跡図を、図1、図2、図3に示した。これらの図は、航海日誌に記録されている緯度、経度を地図上にプロットして、我々が作成したものである。

図で明らかかなように、3隻のイージス艦は、北海道の奥尻島西方にある決まった地域において滞留し、監視・追

図5 テポドンから米国に向かう大圏コースのスケッチ



跡作戦に従事している。しかも、この地域は航海日誌に「BMD作戦地域」あるいは「BMDステーション」と記載されている地域である。この作戦区域における航跡を拡大して図示すると図4のようになる。これは、地図と同様に、航海日誌にある緯度、経度をプロットしたものである。この図によって、奥尻島西方約190kmである北緯40度05分、東経137度06分を中心に約80km四方に集中して作戦が展開されていることが判る。これは、重要な新事実であり、この海域を本論では「BND作戦区域」と考えることにする。

これが意味する重要なことは、日本海パトロールとは、日本海を巡回しながらパトロールする作戦行動ではなく、作戦海域を設定した監視・追跡作戦であるということ

である。後に説明するように、これはミサイル防衛局長の議会証言から推定される内容とも一致する。

ローテーション

次に、3艦のローテーションを見やすくするために、配備状況を時系列に並べた表を掲げた(5ページ)。カーチス・ウィルバーがMD作戦区域で活動してから、フィッツジェラルドが同区域に展開するまで、約45日の期間がある。さらに、マッケインが次に配備されるまでやはり約45日の期間がある。この間に、3艦以外のイージス艦がMD作戦区域に配備されたかもしれないという事実を完全に否定することは出来ない。しかし、それは極めてありそうにないことである。長距離監視・追跡能力を持ったイージス艦が限られているし、他の軍艦の日本への寄港情報はない。したがって、45日という間隔に厳密な意味はないであろうが、現時点では、3艦が交替で限られた期間のみ、監視・追跡任務に携わったと考えられる。

つまり、米軍のMDパトロール体制は極めて限定的な試験段階であることが、われわれの調査で明らかになった。常駐配備などはほど遠い現状である。

現状分析

以上のような調査結果は、何を意味するのであろうか。05年3月15日、米下院軍事委員会戦略戦力小委員会においてオベリング3世ミサイル防衛庁長官が行った議会証言²が、この調査結果を分析するのに極めて重要である。関連部分を資料として訳出した。

オベリング3世は、ミサイル防衛を試験的に一步一步配備してゆく方法論を説明した後、昨年(04年)のMD初期配備開始の目的は、北朝鮮の長距離ミサイルに対する米本土防衛であったとはっきりと述べている。一方、同盟国や在韓米軍・在日米軍の防衛は「移動式迎撃体の増強」で対応するとしている。これはパトリオット

資料

ミサイル防衛庁長官の議会証言(抜粋)

空軍中将オベリング3世

05年3月15日、米下院軍事委員会戦略戦力小委員会

「昨年、地上配備の中間飛行段階(ミッドコース)防衛、およびこの統合システムとしてのイージス艦による監視・追跡能力を初期実地配備することによって、我々は、北朝鮮の長距離ミサイルの脅威に対して合衆国の限定的な防衛能力を確立しようとしている。同時に、我々は、より短い射程の脅威に対して連合軍部隊、同盟国、友邦国を守るために我々が持っている移動式迎撃体を増強しようとしている。同盟国や友邦国と協力して、我々はこの防衛能力を進化させ、あらゆる飛行段階におけ

る、あらゆる射程の脅威に対してMD力を改善し、また、やがては追加的な迎撃体、センサー、そしてMDの層をもって拡大する計画である。(「ミサイル防衛のアプローチ - 層状の防衛」の項目から)

「昨年、我々は『2004年末までに、統合されたBMDシステムの初期要素を実地配備するだろう』と述べた。我々は、ほぼすべての目的を達成した。アラスカのフォート・グリーリーのサイロに6発、カリフォルニアのバンデンバーグ基地に2発の地上配備迎撃体を設置した。アラスカのコブラ・デー

レーダーの高性能化と、6隻のイージス艦の長距離監視・追跡支援のための改造を完成した。これらの諸要素は、発射制御システムに完全に結合され、広範囲の指揮・統制・戦闘管理・通信インフラストラクチャーによって支援されている。」

「2004年10月以来、米海軍の軍艦が作戦艦隊に入る前に認可されるときに用いられるのと同様な試運転あるいはチェックアウトを行っている。...イージス艦は、我々の戦闘管理システムに長距離監視・追跡データを提供するために日本海に定期的に配置されている。」(「ブロック2004の初期的実地配備」の項目から)

(訳と強調:ピースデポ)

BMD任務の航海記録の概略
(04. 9. 27~05. 3. 31)

月日	カーチス・ウィルバー	フィッツジェラルド	J.S.マッケイン
04.09.27	横須賀を出港(北上)		
28			
29	BMD作戦区域		
30		(04.10.01より記録)	(04.10.01より記録)
10.01		横須賀に停泊	横須賀に停泊
02		(略)	(略)
03			
04			
05			
06			
07			
08			
09	黄海へ		
10-12	(台風避難)		
13	(DLに位置の記録なし)		
14	BMD作戦区域		
15	佐世保へ		
16	佐世保に寄港 (略)		
26	横須賀に帰港 (以下略)		
11.29		横須賀を出港(北へ)	
30			
12.01		BMD作戦区域	
02			
03			
04			
05	(BMD作戦区域周辺)		
06			
07			
08			
09			
10-15			
16	釜山へ		
17	釜山に寄港 (略)		
18-19			
22		横須賀に帰港 (以下略)	
05.01.13			横須賀を出港(南下)
14-15			
16			佐世保に寄港
17			佐世保を出港、BMD作戦区域へ
18			
19-22			
23			BMD作戦区域
24			
25			
26			
27			
28			
29			
			横須賀に帰港 (以下略)

(PAC3 部隊の韓国への配備や日本の購入を指しているであろう。

さらに、オベリング3世は、10月1日からの初期配備について、日本海のイージス艦の長距離監視・追跡情報によってアラスカのフォート・グリーリーもしくはカリフォルニアのバンデンバーグ基地の地上迎撃ミサイルを発射して迎撃するという明確なシナリオをもって進められていることを証言している。また、「戦闘管理システムに長距離監視・追跡データを提供するために日本海に定期的に配置されている」と述べているように、監視・追跡データと戦闘管理システムと迎撃ミサイルの発射管理システムを結合した運用が行われているのである。したがって、現在の日本海定期パトロールは、常時の監視・追跡そのものより、地上配備迎撃ミサイルとの連携訓練、つまり統合システム全体の演習が中心と思われる。

そのような目的から考察すると、日本海における作戦場所として選定された「BMD作戦区域」が奥尻島西方

190km付近であることは、たとえばポドン(大浦洞)から米国のハワイやロサンゼルスに至る大圏(最短軌道)の下に位置している(4ページの図5参照)ことから理解できる。また、常駐するのではなく、定期的に変更で監視・追跡任務に就いていることも理解できる。

ただし、誰もが疑問に感じることであろうが、米国は北朝鮮の長距離ミサイル攻撃を本当に脅威と感じているのだろうか。答えは「ノー」とも言えるし「イエス」とも言える。ひとたび「脅威の仮説」の下に走り出した現ブッシュ政権は、ひたすら仮説を肥大させて走り続けざるを得ないのである。何という愚かな資源の浪費であろうか。潤うのは軍需産業ばかりである。

米本土防衛の基地・横須賀

ここに日米安保関係に新しい状況が生まれたことを認識することが重要である。米国は、直接的に米本土防

SHIP'S DECK LOG SHEET

IF CLASSIFIED STAMP
SECURITY MARKING HERE

USE BLACK INK TO FILL IN THIS LOG

SHIP TYPE		HULL NUMBER		YEAR	MONTH	ZONE	DAY	USS <u>CURTIS WILBUR</u>	CLASS HANDL			
D	A	DD	54	4	09	I	30	AT/PASSAGE FROM <u>MOGLOC</u>				
POSITION 0800		ZONE		TIME		POSITION 1200		ZONE		TIME		LEGEND 1-CELESTIAL 2-ELECTRONIC 3-VISUAL 4-D.R.
L		BY		BY		L		BY		BY		
λ		BY		BY		λ		BY		BY		
TIME	ORDER	CSE	SPEED	DEPTH	RECORD OF ALL EVENTS OF THE DAY							
18-21	23-29	30-32	33-36	37-40	77							
2300 - 0300 (cont)												
UW AS BEFORE IN THE SEA OF JAPAN IN SUPPORT OF BMD. SOFA AND OTC IS THE COMMANDING OFFICER USS CURTIS WILBUR. E NEW DECA SET. THE ENGINEERING PLANT STATUS IS AS FOLLOWS:												

<イージス駆逐艦「カーチス・ウィルバー」の04年9月30日00:00~06:01の航海日誌の一部>
初めてBMD(弾道ミサイル防衛)任務が記載されている。1~2行目に「BMDを支援して、以前と同じように日本海を航海中」とある。

SHIP'S DECK LOG SHEET

IF CLASSIFIED STAMP
SECURITY MARKING HERE

USE BLACK INK TO FILL IN THIS LOG

SHIP TYPE		HULL NUMBER		YEAR	MONTH	ZONE	DAY	USS <u>CURTIS WILBUR</u>	CLASS HANDL			
D	A	DD	54	4	10	I	09	AT/PASSAGE FROM <u>BMD STATION</u>				
POSITION 0800		ZONE		TIME		POSITION 1200		ZONE		TIME		LEGEND 1-CELESTIAL 2-ELECTRONIC 3-VISUAL 4-D.R.
L		BY		BY		L		BY		BY		
λ		BY		BY		λ		BY		BY		
TIME	ORDER	CSE	SPEED	DEPTH	RECORD OF ALL EVENTS OF THE DAY							
18-21	23-29	30-32	33-36	37-40	77							

<イージス駆逐艦「カーチス・ウィルバー」の04年10月9日15:25~18:13の航海日誌の一部>
台風避難のためと思われるが、BMD作戦区域から離れるときの記述。右上部の場所記入欄に「BMDステーションから対馬海峡へ航行中」と記載されている。

SHIP'S DECK LOG SHEET

IF CLASSIFIED STAMP
SECURITY MARKING HERE

USE BLACK INK TO FILL IN THIS LOG

SHIP TYPE		HULL NUMBER		YEAR	MONTH	ZONE	DAY	USS <u>FITZGERALD</u>	CLASS HANDL			
D	A	DD	062	4	12	I	01	AT/PASSAGE FROM <u>BMD OCEAN</u>				
POSITION 0800		ZONE		TIME		POSITION 1200		ZONE		TIME		LEGEND 1-CELESTIAL 2-ELECTRONIC 3-VISUAL 4-D.R.
L		BY		BY		L		BY		BY		
λ		BY		BY		λ		BY		BY		
TIME	ORDER	CSE	SPEED	DEPTH	RECORD OF ALL EVENTS OF THE DAY							
18-21	23-29	30-32	33-36	37-40	77							
2300												
2200 - 0300 (cont)												
CONTINUED THE WATCH UNDERWAY ISE IN THE SEA OF JAPAN CURRENTLY AT BMD STATION. ENGINEERING PLANT STATUS IS AS FOLLOWS: NR 2,3 GTG'S, NR 1,4 A/C UNITS, NR 2,3 SWS PUMPS, NR 4,5 FIRE PUMPS, AND BRAVO HP'S ARE ONLINE.												

<イージス駆逐艦「フィッツジェラルド」の04年12月1日23:00~2日01:40の航海日誌の一部>
右上部の場所記入欄に「BMD作戦区域にて」とある。また、1~2行目に「監視を継続。現在、BMDステーションにおいて日本海を単独航海中」と記載している。

語りへの 後ろにある、 たくさんの魂への 想像力を

大石芳野さん

フォトジャーナリスト



私は1984年にヒロシマの被爆者の写真を撮り始めました。それまでもずっとヒロシマを撮りたい、という思いはあったのです。でも、ヒロシマがまだ生々しい時期に、完璧に近い写真を撮った土門拳さんのような偉大な先輩たちがいたことで、なかなかシャッターを切ることができずにいました。しかし、84年になって、土門さんが撮っていたころのヒロシマと、私が見ているヒロシマは大きく違う。そこに生きてきた人たちも違う時代を一日一日と生きてきたのだから、と考えるようになりました。被爆者一人一人が、どうやって1945年8月6日から1984年まで生きてきたのか、そのことがすごく気になりました。私自身、被爆者たちと同じ時代に生きるひとりの人間として、被爆者一人一人が抱えてきた何十年という時間の重みを撮れないだろうかと考えました。写真を撮るといふ行為によって、被爆者にとって今の時代がどのような今なのか、そして私たち日本人にとってはどのような今なのか、それを明確にしたいと思ったのです。

一人、また一人と、何年もかけているいろんな人に会い、話を聞き、10年かかって一冊の本にまとめました。被爆者一人一人の半世紀を紐解いてみれば、それは被爆者でない私たちの想像力では到底及ばないものでした。たくさんの死

を体験してきた被爆者たちは、今も終わらない地獄を見ています。生き残った人々は、なぜ自分が生き残ったのかという疑問を抱えて生きています。「水をくれ、と助けを求めた大勢の人たちを置いて自分は逃げてしまった、と負い目を感じ、苦しんでいる人もいます。そして、無事に生き延びたとしても、さまざまな原爆症に苦しみ、周りの人々が次々と亡くなっていくのを見ながら、次は自分かもしれないという恐怖に苦しみ続けています。命の尽きるその日まで、一日たりとてその苦しみを忘れることはないのです。被爆者に向かってシャッターを切るなかで、彼ら・彼女らと同じ時代に生きるということの意味合いを私たちは認識しなければいけない、写真を撮ることでそのことをなんとしても伝えたい、との思いを強くしました。

「原爆は人類を破滅させる」 被爆者たちは何よりそのことを伝えたいと思っています。被爆者一人一人の背後には、亡くなった人々のたくさんの魂があるのです。そういった山のような魂の「声なき声」を、いま自分が伝えなければ誰が伝えられるのか。そういった思いが彼ら・彼女らを語らせているのです。自分のような苦しみを二度と誰にも味わわせてはいけぬ、という思いからです。

伝えることは苦しいことです。自分の聞いたこと、遠いものは語ることができませんが、すぐ皮膚の下みたいなものを語ることは辛いことです。もちろん差別の問題もあります。それから、私が取材において一番多く聞いたのは、やはり当時を思い出したくない、思い出すと眠ることができない、という声です。話すということは思い出すことだけではなく、同時に引き戻されるということなのです。

そのようななかでも語り部になっている人、語り部でなくても訪問を受け入れてくれる人々がいきました。自分自身が何十年も苦しみ続けているのに語り続ける、それはすごく尊い行為です。そんな被爆者一人一人の尊い思いに、私たちは耳を傾けないわけにはいきません。広島、長崎を訪ねる若者たちも多いと思いますが、証言する被爆者のうしろにある、たくさんの魂の声を聞くという想像力を持って欲しいと思います。

そして伝わった人たちは繋がって欲しいと思っています。輪が二つできるように、人と人が接点を持って繋がっていくことのお手伝いを、「写真」でできればいいと思っています。これはヒロシマに限ったことではなく、写真を撮るといふ行為はそういうところにあります。もし人と人が精神的に繋がっていくということがなくなってしまうと、私たちは人間として存続できないのではないのでしょうか。人間として生まれたからには、人と繋がっていくことがあたりまえだと思います。被爆者たちの思いは、この時代に生きる私たちが受け継いでいかなければならないのです。

(談.まとめ:中村桂子)

おいしい よしの フォト・ジャーナリスト。アジア、西アフリカ、ヨーロッパなどで戦争や内乱といった極限状態に生きる人々のドキュメンタリー写真を撮り続けている。1995年に写真集『HIROSHIMA 半世紀の肖像』角川書店 を出版。「世界平和アピール七人委員会」委員。

u ç 5ページからつづく

衛のための軍事活動を在日米軍基地を使って始めたのである。これは、日米安保条約では許されていない活動であり、少なくとも新しい国会議論を起こさなくてはならない。最近、政治家や報道関係者が、軍事活動は法律に基づいてのみ許されると言う法の支配、あるいはシビリアン・コントロールの原点を忘れようとしていることに警鐘をならしたい。

冷戦時代、中曽根首相が日本を不沈空母にと言ったとき、米国は対ソ前進基地として日本を使った。しかし、その時は安保条約に定められた日本防衛と一体の軍事行動であると主張することができた。しかし、今度

はそれとは違って、純粋に米本土防衛の活動を日本の基地を使って行っているのである。思いやり予算によって、この直接活動に携わる兵員を支援することは、集団的自衛権の行使ではないか。このように、横須賀基地に新しい性格が加わったことを銘記する必要がある。

膨大な量のデータの分析や作図に当たって下さった藪玲子さんに感謝したい。また調査の一部を林公則君に手伝っていただいた。

注

1 イングランド米海軍長官の米国防省における記者会見(04年10月1日)

2 <http://www.mda.mil/mdalink/pdf/spring05.pdf>

日誌

2005.7.6~7.20

作成:中村桂子、林公則

DOE=米エネルギー省 / FT=ファイナンシャル・タイムズ / MD=ミサイル防衛

7月6日 主要国首脳会議(グレンイーグルズ・サミット)が開幕。8日、北朝鮮の核開発計画の完全放棄要求など盛り込んだ議長総括を発表。

7月8日 「核物質防護条約」改正で、日米など主要加盟国代表が核物質の防護措置を国内の輸送、使用等にも適用等定めた改正案を採択。

7月10日 ライス米国防務長官、胡錦濤国家主席、温家宝首相、李肇星外相らと北京で会談。

7月11日 核燃料サイクル開発機構、9月から行う高速増殖炉原型炉もんじゅの改造工事に向けた準備工事を開始。報道陣に公開。

7月12日 第10回南北経済協力推進委員会、韓国によるコメ50万トンの食糧支援や共同事業実施などの経済協力を盛り込んだ合意文を採択。

7月12日 ライス米国防務長官、小泉首相、細田官房長官、町村外相と会談。6か国協議で具体的進展を図る必要がある、との認識で一致。

7月12日 韓国、6か国協議で示す「重要提案」を発表。北朝鮮が核計画放棄に応じれば200万キロワットの電力を直接供給する計画を明らかに。

7月13日 ライス米国防務長官、ソウルで盧武鉉大統領と会談。潘基文外交通商相との共同会見で韓国政府による「重要提案」を評価。

7月13日 中国・胡錦濤国家主席の特使として、唐家セン國務委員が平壤を訪問。金正日総書記と会談。中国・新華社通信。

7月14日 日米韓3か国、6か国協議での対応策を検討する代表者会合をソウルで開催。

7月14日 MDの迎撃手続きを定める自衛隊法改正案が参院外交防衛委で可決。

7月14日 大野防衛庁長官、参院外交防衛委で、日米共同開発のMDに關し「米国から要請があれば、...第三国への供与があり得る。」

7月15日付 中国人民解放軍の朱少将、中台紛争下で米国が中国本土を攻撃すれば、中国は核攻撃も辞さない」と表明。英紙FT。

7月16日付 ボドマンDOE長官の助言機関、核研究機関・施設などの整理統合など、「核製造インフラ」の抜本的変革を勧告する報告書をまとめる。共同。

7月17日付 米海軍が奥尻島沖の日本海に「MD作戦区域」を設定、横須賀基地のイージス艦が航行を繰り返していることが判明。本号参照。

7月18日 米印首脳会談。原子力の平和利用や宇宙開発、軍事など幅広い分野での協力関係強化を盛り込んだ共同声明を発表。

7月19日 中国外務省、6か国協議を7月26日から北京で開催すると発表。

7月19日 経済産業省、日本原燃の六ヶ所村再処理工場に続く第2再処理施設について検討する小委員会の設置を決定。

7月19日 大野防衛庁長官、PAC3の国内ライセンス生産に關し米政府と合意と表明。

7月20日付 防衛庁、ミサイル防衛で、PAC3を新たに空自岐阜基地の第4高射群に導入する方針を固める。共同。

7月20日 米横浜防衛施設局、海軍横須賀基地の12号バース延長工事の付帯工事について、港湾法に基づく協議書を横須賀市に提出。

沖繩

7月6日 県議会が6月定例会本会議で「米沖空軍隊員による少女強制わいせつ事件に關す

る抗議決議」を全会一致で可決。

7月7日 普天間、嘉手納など11施設をめぐる米軍用地強制手続で、県収用委員会が強制使用を裁決。

7月8日付 6日午前9時過ぎから7日9時までホワイトビーチに米原潜が寄港。

7月8日 県議会が6月定例会本会議で「米陸軍複合射撃訓練場の暫定使用に關する抗議決議」案と意見書案を全会一致で可決。

7月8日 9月上旬の提示を目指す日米軍に關する中間報告で、普天間基地の移設先と移設時期を明示することが明らかに。

7月8日 米兵による少女わいせつ事件で、第18航空団が嘉手納基地内の全ての軍人・軍属・家族に対し夜間外出禁止を発令。

7月10日 普天間基地早期返還や県内移設反対等を訴えるため、伊波洋一宜野湾市長ら要請団が米国へ出発。

7月12日 米陸軍が、キャンプ・ハンセン内レンジ4の都市型戦闘訓練施設を使った実弾射撃訓練を開始。

7月15日 普天間代替施設建設に伴う環境影響評価書方法書にジユゴン調査等を追加。

7月15日 キャンプ・ハンセン内で山火事。

7月20日 今年1月から6月までの米軍犯罪は26件。前年同期に比べ微減。

今号の略語

BMD=弾道ミサイル防衛

MD=ミサイル防衛

PAC3=パトリオット・ミサイル

SM3=スタンダード・ミサイル

ピースデポの会員になって下さい。

会費には、『モニター』の購読料が含まれています。会員には、会の情報を伝える『会報』が郵送されるほか、書籍購入、情報等の利用の際に優遇されます。『モニター』は、紙版(郵送)か電子版(メール配信)のどちらかを選択できます。料金体系は変わりますが、詳しくは、ウェブサイトの入会案内のページをご覧ください。(会員種別、会費等については、お気軽にお問い合わせ下さい。)

ピースデポ電子メールアドレス:事務局 <office@peacedepot.org> 梅林宏道 <CXJ15621@nifty.ne.jp>

田巻一彦 <tanaki@pw.catv.ne.jp> 中村桂子 <nakamura@peacedepot.org> 丸茂明美 <marumo@peacedepot.org>

宛名ラベルメッセージについて

会員番号(6桁):会員の方に付いています。「(定)」:会員以外の定期購読者の方。「今号で誌代切れ、継続願います。」「誌代切れ、継続願います。」:入会または定期購読の更新をお願いします。メッセージなし:贈呈いたしますが、入会を歓迎します。



次の人たちがこの号の発行に参加・協力しました。

秋山祐子(ピースデポ)、田巻一彦(ピースデポ)、中村桂子(ピースデポ)、丸茂明美(ピースデポ)、青柳絢子、大澤一枝、塚田晋一郎、津留佐和子、中村和子、林公則、藪玲子、山口響、梅林宏道